

県教育庁教育次長 久保田 範夫

いきなり個人的な話で恐縮ですが、私は過去3回、大きな地震を体験しています。

1回目は、「1978年宮城県沖地震」。

昭和53年6月12日、17時14分発生、マグニチュードは7.4、最大震度5が仙台市、福島市、死者は28名。そのとき私は、仙台の大学で学んでおり、講義が早めに終わって下宿にいました。被害状況もよく分からないまま、18名の命を奪った手抜き工事のブロック塀が散乱する灯りが消えた市内を、友人たちの安否を確かめるためバイクで走り回っていました。

2回目が、「2005年宮城県沖地震」。

平成17年8月16日11時46分に発生。マグニチュードは7.2、最大震度は宮城県川崎町で6弱、福島市、田村市等で5弱。負傷者は100人、死者はゼロ。仙台市のスポーツ施設の屋内プールで天井が9割方崩落、震度4の埼玉県加須市で民家1棟が全壊。

私は、福島県庁西庁舎9階で仕事をしていました。背の高いロッカーがほとんど倒れ、窓際にいたために外に放り出されるのではないかと感じたのを覚えています。

そして、「平成23年東北地方太平洋沖地震」。

2011年3月11日14時46分に発生、マグニチュードは9.0、宮城県栗原市で最大震度7を観測、6強が双葉町等、6弱が福島市、郡山市等、東京でも震度5強の巨大地震でした。

自分では落ち着いていたつもりでしたが、声はかすれ、5分以上続いた地上9階の凄まじい揺れに、なまじ6年前の地震を体験していたため、今度こそ自分は9階から放り出される、西庁舎は倒れるかもしれないと死の恐怖を感じました。

地震後しばらくの間は、方丈記の一節「恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震(なみ・ぢしん)なりけりとこそ覚え侍りしか」という鴨長明の言葉を、心の中で繰り返していました。「これは本当に起きたのか、私はまだ夢の中にいるのではないか」という思いを抱いた人は多かったのではないのでしょうか。夢ではない厳しい現実を突きつけられた私たちは4月以降、他市町村の学校等を間借りしての小・中学校の再開、高校のサテライト方式による授業開始、放射線量を少しでも低減するための方策等々、様々な非常時対応に明け暮れる中、いつしか季節は移ろい、地震発生からやがて7か月が過ぎて、この原稿を書いている私の目の前には、実にどっしりとした福島の山々が威儀を正して居並んでいます。地震も津波も、そして原子力発電所事故も、何事もなかったかのように。私に「芋の露」の句を思い出せと如く。

芋の露^{いも} 連山^{れんざん} 影を正しうす (飯田蛇笏^{だこつ})

山梨県に生まれた作者の代表句であり、中学・高校の教科書にも多く採られています。里芋の大きな葉に、まろまろとした朝露が輝く。遠くを眺めやると、身の引き締まるような秋の冷気の中、連なる山々の姿・佇まいがくっきりと見て取れる。作者の自注によると、南アルプス連峰のようだが、読者は身近な山々を～例えば阿武隈山系、飯豊連峰、那須岳等々を～イメージすればよい。郡山市から見る安達太良山は、富士山を思わせるゆったりとしたシルエットが非常に美しい。一方、福島市から見ると、南から北へ、安達太良山から吾妻山へ、さらに蔵王まで連なる山々は、まさに「連山^{れんざん} 影を正しうす」を思わせる揺るぎない堂々とした質量感があります。

藤田 充 前教育次長が7月のメルマガに書いていたように、福島の大自然は私たちに、そして子どもたちに間違いなく「郷愁」を抱かせてくれる力を持っていると思います。

閑話休題。

自然は悠久不変に見えますが、自然も、そして私たちの世界も「3.11」の前と後ろとでは明らかに違うし、変わらなければならないのだと思います。

では、大震災の前後で何が変わったのでしょうか。大震災直前の新聞を読み返してみると、前首相は政治資金の問題を国会で追及されており、大相撲の八百長問題、京都大学のカンニング事件等をマスメディアは盛んに取り上げており、そのような閉塞した日本の状況は、大震災によって一挙にリセットされたのではないか。おそらく私たちは、未曾有の危機に直面して「今、最も肝心で必要なことは何か」を自ずと理解し、誰もが団結して、不断なら声をかけない人にも声をかけ、協力して災害を乗り切ろうとしました。それは、大震災直前には全くなかった光景だったと言えます。ただ、これは「日本は、そして世界はこのままでよいのか、どう在るべきか」という非常に大きな難問に立ち向かっていくスタート地点の光景なのかも知れません。私たちはこの本質的な難問にこの先ずっと、正面から向き合っていく必要があるのではないのでしょうか。

8月に開催した全国高等学校総合文化祭の開会式、構成劇「ふくしまからのメッセージ」に見られる本県高校生の故郷に寄せる思いと底力は、我々大人に、全国の高校生に、とてつもなく大きなエネルギーを与えてくれました。このエネルギーを得て、私たちは何をすればよいのでしょうか。

私たちは、自覚的に、或いは何となく知っているはずです。大きな壁にぶち当たり進退窮まった時には、原点に戻るしかないことを。私たち教育に携わる人間にとっての原点とは何か。この問いに対する答えは無数にあるのかも知れませんが、私は「授業」が原点であると考えます。優れた「教師」の、周到に準備された授業の中には、全てが詰まっています。進路指導、生徒指導、そして、子どもたちの心を耕すことができる一人の人間として生きてきた人生が。この授業こそが、福島復興の鍵になるはず。＜この稿続く＞